

2019 年度研究促進事業採択課題

リーペレス・ファビオ『ストレンジャーの人類学——移動の中に生きる人々のライフストーリー』（明石書店、2020 年）

本研究は、人の移動の活性化によって、近年増えてきている「どこにいてもストレンジなストレンジャー」の生を明らかにすることを目的とする。具体的には、両親の国籍が異なり、幼い頃から複数の国家、言語、文化を跨いで生きる 5 人の「ストレンジャー」のライフストーリーを記述して、人々が、どのように「差異」と向き合い、どのように自己・他者認識を行い、「他者」と関わっているのかを明らかにする。

そのために、本研究では、インタビューを通して収集した 4 人の「ストレンジャー」のライフストーリーと筆者自身のオートエスノグラフィを材料として、本人の語りを詳細に記述し、行く先々の社会における「他者」との接触と交渉、交友、衝突といった出来事の分析を通して、自己・他者認識の形成過程と「他者」との関係性の構築過程と変容を明らかにする。これらのストレンジャーと他者とが関わる状況を、「折り合い」をキーワードに、ストレンジャー論とコスモポリタニズム論と文化相対主義の実践に関する議論を相対化しながら、人々が差異とどのように向き合っているのかを考察した。

5 人のライフストーリーを記述して分かったことは、「ストレンジャー」はいずれも、移動する過程で、複数言語による教育課程をふみ、様々な「差異」に気付かされ、多様な社会認識および他者認識が生まれ、そしてそこに反映される自己認識も移動の都度、再構築を繰り返していることだ。ストレンジャー論については、5 人は、いずれも自らの抱える「差異」によって周縁化される体験をしており、ホスト社会のマジョリティに受容されるために、異質だと思われる言動や価値観を不可視化し、他者の言動や価値観を受容する「脱ストレンジャー化」の過程を明らかにした。一方で、行く先々の社会で出会う「他者」が持つ「差異」に抵抗を示すこともあり、他者との関わりを断念したり、ためらったりする「再ストレンジャー化」の過程も明らかにした。

このように、ストレンジャーは「他者」との「差異」の「折り合い」を試みるのだが、「差異」はしばしば、個人的領域と文化的領域の間を循環しながら還元され、一方的に譲歩することもあり、衝突することもあるわけで、文化相対主義の実践も「自省型マルチエスノセントリズム」とも呼べる傾向が見られた。

本研究の成果は、植松基金の助成により『ストレンジャーの人類学』の出版を通して報告することができた。